

地方生物学の一方

細見 彬 文

①ファウナとフロラ

以前から私にはある種の心配があった。それは、兵庫県生物学会に限らず、地方の生物学同好会に、今一つの非発展的状态がおとずれているのではないかという心配なのである。地方同好会の内でも全国まれに見る組織を持った兵庫県生物学会から、地方のごく小さなグループにいたるまで、行きづまり状態は来ている様である。

私はこの原因がなにによるものであるか、そうして、どの道が将来発展をもたらすものであるかを分析検討してみる必要があると考えたのである。

もち論、中心として論じられるのは兵庫県生物学会である。しかし、このことは、日本全国の地方生物同好会に共通した問題を含んでいる。全国のアマチュアが今一度、自分達の立場を考えて、より有意義な研究をなすための一つの考え方を提案するもので、問題は県内だけにとどまるものではない。私の真のねらいはそこにある。だからいくぶんの別刷も作って多くの人達に意見を聞きたいと考えている。

私がどうして地方生物研究に行きづまりが来ていると考えたのか。その理由から説明しなければならない。

ために、兵庫生物の第1号から最近号まで手にとって、その内容のうつり変りをながめて見ると、最初の3号までは広い分野にわたって豊富な内容が盛られており生理学、古生物学、生態学、応用の各分野にわたる論文が発表されている。そしてFaunaやFloraに関するものはごく少いのであるが、本誌が4号になるとこの関係は逆転して、がぜん、いわゆる目録を中心とした博物的な記載が増えてくるのである。この傾向は最近になってもおとろえず、全体の約8割がそれらの記事でうめられることになっている。このことこそが、地方生物学を停滞させている非常に大きな原因であると考えられる。

眼をもう少し小さな地方にうつして見よう。氷上郡はその昔からアマチュア生物研究の盛んな所で、目録も多くのものについて出されている。それは1934年の氷上郡植物目録から及んで羊歯植物、菌類、有毒植物、脊椎動物、蝶類、軟体動物、クモ、そして最近では1958年の昆虫目録がでて、ほぼ高等生物全域にわたって相当時間をかけた調査がなされており、どの目録も完全に近いものであろうと考えられる。

さて、兵庫県にしても、その一地方の氷上郡であって

も、また日本全国多くのローカル地域においても、アマチュアによるこの種の仕事は非常に多いものだろうし、また目録作りはアマチュアの一つの特権でもあるのであるが、この仕事はその使われるエネルギーに比して、生物学の理論を作り上げていく上で、どれほどの価値を持つものなのか私は疑問なのである。たしかに、私も軟体動物に関するいくつかの目録を作った経験はあるが、生物学の理論形成の上でどれほどの役割をはたすのか自分自身もわからないでいたし、今でも理解しにくいのである。Fauna 作りにとりかかる上で、はっきりした目的を持って仕事をなす人達はごく少いようである。実を云えば、私も目的を持っていなかった。強いていえば他人のまねごとでもあり、ささやかな名譽欲の満足でしかなかったようである。だから Fauna ができ上ってみても、それを使ってさらに一步前進するような気の利いた仕事が生れてこなかったのも無理はない。

FaunaやFloraの完成を目指している地方のアマチュアの多くが無目的にそれらを完成させることに一生懸命になっているのを私は知っている。これらの仕事が全く無意味だとは云わないが、それらの多くの努力にもかかわらず、生れてくる理論は僅少である。Faunaを作るためには進化機構を説明する手段としての動植物地理学の上で、明確に位置をしめるものとして出発しなければならないという前提が大切なのではないか。

さて、ある地方である目録が誰かの手によって完成されたとして。たとえば蝶の目録がA氏の手によって完成されたとすれば、A氏やA氏と共に蝶の好きなその地方の同好者は、次にどんな仕事を初めるだろうか。私の知っている限りでは3つの方法をとる様である。1つはさらに多くの蝶をその地方から記載しようと努力を初めその地方では非常に得難い種類を発見して驚喜し、いくらか種類が増えたことで満足するか、又は、第2の方法として、その地方だけにあきたらずに地域範囲を拡大して同じ様な仕事をくりかえしてまた目録を作るか、第3の方法は、蝶をやめて、コガネ虫の目録作りを初めるのである。私がゆきづまりと称するのは、正にこのことなのである。学問としての発展の可能性がここではもはや断たれているわけなのである。このような墓石を磨くような仕事はいくらやってみたとて大したことにはなるものでない。

私がゆきづまりと称する他の原因の1つに分類研究家の態度がある。ある1つの特徴をとらえて動植物を分類するという態度である。軟体動物を例にとれば、貝殻で分類していたものを、生殖器でやり、歯舌でやり、または産地が異なるから違うのだという議論までとびだし、動物の微細な特徴をとり上げて分割すべきだとか、統合すべきだとかいう議論である。あるいはまた、動物のある部分だけの比較から分類上の位置を動かすような試みである。むやみに小さく分けてマニアを喜ばしめてあそぶ傾向である。このことが梅棹忠夫氏をしていみじくも枚挙精神と言わしめ、柴谷篤弘氏にその当否はともかくも生物学は切手蒐集か、分子生物学に分けられると云わせた原因なのである。

私は分類学を軽視したり、学問的に無意味な仕事などとは決して思わない。進化とはっきり結びついてなされる仕事は、生物学研究の基礎になり、大切な方向だと考えている。分類学は大切であるからこそ間違った考え方から出発してなされる分類学よりうける被害は大きなわけである。

問題は小さな違いを見つけて別種を作ったり、逆に統合したりするところにあるのではない。二個体が同種だとか別種だとか云い合ってもなら学問の発展にはならないのである。重要なポイントは、なぜ違いが生じたかという点にあるのであって、なぜ変化するのかという点なのである。問題は純粹に、進化機構の解析にある。

これらの行きづまりを生みだす間違った方向はなぜ生れて来たか。その最大の原因は目的のない研究態度から生じてくる。それは科学のための科学という間違った考え方から生れてくる。こういう思考方法は、自分のやっている研究が学問のどの部分に位置づけられるのかということすらわからなくしてしまう可能性が多い。

②アマチュアと専門家

さて、では我々アマチュアはどのような方向に研究をおし進めればよいか。そのことを考える先にまずアマチュアと専門家という立場を考えてみたい。

アマチュアの多くは自分達が生物を研究することは趣味としてやるべきだと考えているようである。また理論研究は専門家にまかせておけばよいのだという考え方を持つ人達もいるようである。そしてアマチュアが新しい理論的解釈を下したりすれば周囲から妙に見られがちなものである。しかし、かえって理論研究は研究室にいる人達よりも、外にいて活躍している人達の方が制約を受けないという点でもっと自由にスムーズに行われるということが現在では見逃せない現象である。なにもこのことは今に始まったことではないが、大学では講座制に

しばられているところが多く、発言しにくいのである。だからアマチュアは自由であるということが1つの特徴でもある。我々はこの特権を大いに活用すべきでないかと考えるのである。

しかしながら、アマチュアには時間もなければ、設備もないし、文献も読めたものではない。いつも気になるのはこのことなのである。他の職業にありながらも学問的な情熱を持ち続けている人達は多い。しかし、これらの諸事情は前進する人達をはばまずにはおかない。若い間はファイトで切りぬけることも出来るだろうが、峠を越せばそれもゆかなくなる。このところを解決しなければ、我々に学問研究の糸口は開かれない。

文献、設備、時間という基本的条件がととのっていないために、アマチュアの研究は、いきおい、手っとり早いFauna作りか、微細分類の方向に進みがちになるのである。我々にこれらの制約がある限り趣味で生物学を満足しなければいけないのか。目録作り以上には出ることができないものなのか。これらの悪条件をなんとか解決できないものか。

私はここに一人の例を出して考えることにしたい。西村登氏は当生物学会の会員であるが、但馬関宮で中学教員をやりながら水棲昆虫の生態学的調査ととりくんでおられることは多くの人達の知るところである。他の職にありながらも、氏が最近特に重要視されている底棲昆虫の調査を行われ、生物学に限らず、生産とも結びついた大きな成果を上げておられるその鍵はどこにあるか。

結論から先に出せば、それはグループ活動にあると言える。氏は1958年、京大動物教室に内地留学され、1年間、河川群集研究グループの中でその方面の研究に着手され、その後「ヒゲナガカワトビゲラの飛翔」「円山川における底生昆虫の分布概要」などきわめて生態学の上でも重要な論文を発表された。この成果は氏の個人的努力がもち論大きいのであるが、その行動を力づけ、また氏が理論学習の大きなよりどころとされているのは河川グループなのである。

アマチュアは概して理論に弱い場合が多い。長年月、生物学ととり組んで研究をつみ上げている人でも理論に弱い場合が多い。だが西村氏がみごとにこの点を克服された原因は氏の個人的努力にプラスして、グループの中の相互協力と、理論交換の力があつたことは否定できないのである。

さて、結論は我々は方々で地方学習グループを作る必要があるのではないか。我々自身が生物学理論でもって、自分の研究を学問的に位置づけることにおいても、同学の志にかこまれて力づけられることだけでも、討論学習活動は必要である。 以下p 151へ

(p.200より続く)

これらの活動は、兵庫生物がひどく専門的になったという声を意味のないものにしてしまうだろう。それが兵庫生物に記載される論文に分析的な方向ばかりでなくして、総合的な方向をも見出させるであろう。討論形式にせよ、輪読形式にせよ、お互の研究の相互批判ができる場が必要である。このことこそがアマチュアに最も不利な諸条件を救ってくれる大きな力になると思う。

追記

この原稿を書き終って一か月ほどしてから、神戸では現代生物学セミナーが、長田高校の安房先生のお世話で開かれることになった。大変うれしいことでもあり、多くの人達の参加が望まれる。